

木を山を森を育てていく

名人 玉井 久勝・奈良県吉野郡川上村

間き手 藤原 未央・岡山県立矢掛高等学校1年

■自己紹介

私の名前は、玉井久勝です。昭和31年11月1日生まれの62歳です。生まれた場所は、ここ川上村です。今も、川上村に住んでいます。家族構成は、生まれたときは、祖父・祖母・父・母・弟が1人の6人家族です。

■生い立ち

私の、子供のときの夢は、今、覚えているのは私の祖父の兄弟がお医者さんをしてたので、たぶん一番最初、小学校のときに将来の夢はと尋ねられたときはお医者さんになりたいみたいなのを書いて記憶があります。

性格は、田舎の長男ですから、どちらかというとのんびり屋で、家が代々山守という山の管理者をする家の本家を継いでいる、直系の家だったので、今でいうボンボンって感じです。

私は、小学校はこの生まれた川上村ですが、中学生のときから、これは

私の2代・3代ぐらい前から続いていたらしいんですけど、外にいったん出ると。村を出るということで、そして奈良県内ですけど、別のところの私立の中学校・高校・大学・専門学校を経て昭和54年の11月に生まれた川上村に帰って、林業に携わるようになりました。

家を継ごうと思っただけではなく、直系の男子は世襲制で家を継がないといけません。別に長男ではなく次男坊でもいいんですけど直系の男子が継ぐということになってるので、私が生まれたときには家を継ぐという道筋ができていたということです。

■年間スケジュール

かなり昔と変わってきたので、代表的な例という川上村も雪が降ります。昔は、かなり積りましたが今は、少なくなっています。

まず、雪解けのころから苗を植えてそれを育てていくという仕事。そして、6月と9月ぐらいに雑草が生えてくるので、それを除去してやるという

う仕事が植え付けから始まる。梅雨が明けたころに、大きくなった木を切つて秋から、次の年の春までの間に木を山から道路まで運んできてトラックに乗せて、木の市場まで持つて行ってそこで売るといふ作業です。私は年間200日ぐらいは山に入って仕事をしています。基本、山は雨の日や天気の良い日は行けません。無理して行くこともありません。基本、基本雨や雪の日は休んでます。だから、雪が降つたときは1月・2月・3月の初めぐらいまで山に入れないときもありました。

■山守とは

山守っていうのは、この辺の吉野林業地帯という、奈良県の川上村とか吉野町、この辺り一帯を指す広い地域で、約500年以上前から林業が始まって、長い林業の歴史があるなかで、植林された山の現場を管理する。本人が持つているんじゃないしに、所有者は別に山主がいて、簡単にいうと番頭さんみたいなところかな。その番頭さんが1人じゃないしに、その地域、地域にいる。集落の所有者が持つている山を任されて、現場管理をして、山にある木を切つたりする権利を有するという仕事です。

■山守の仕事

私は、200ヘクタールの広さの山の管理プラス、自分で山を持つていてその山の中を一年中かけて色々なところで、ここは若い山、ここは中ぐらいの山、ここはすごく大きい山と年代が全然違うところがあつてそれなりの仕事がある。そして、若いときには若いときの木を切る仕事があり、枝を掃つたり、間引いたりする仕事があります。中ぐらいの山になると、切つた木を柱がとれるくらい大きくなるとそれを切つて市場に持つて行く作業があります。また、大きい山になつてくるとそれが柱などになる木のプラスになります。

木の切りかたは、テレビとかでよく見る、両側の端っから中心にかけて切つて倒すという方法は、あまり良くありません。私たちにいわせれば特殊な切りかたになります。川上村あたりの地域は、山の傾斜に対して木が立っているから、これを上の方に切る、いわゆる上方伐倒という切りかたをします。木を倒したときにくる木に対する衝撃が、上方伐倒の方がやわらかいので、材が傷みにくくなります。そして、この地域は昔から葉がらしといつて、切つた木を3ヶ月から1年の間置いておいて、木の中に含まれる水分を葉っぱから蒸散させて、木が持つている水分量を減らします。水分を減らすということは、木の色が良くなつて材が軽くなり、運ぶのが楽になるというメリットがあります。

それから、造材といつて、ヘリコプターなどで吊り上げて、林道というトラックが走る道までおろしてきて、木を市場で売りやすいような長さに切つて、トラックで原木市場まで持つて行きます。

仕事で使う道具は、主にチェーンソーとワイヤーとワイヤーをかけるフックとロープです。チェーンソーは、切る木の太さによって使うチェーンソーの大きさも変わってきます。ロープの太さも、切つた木の太さに合わせ



切る木の大きさによってチェーンソーを使い分ける

て変えていきます。ロープも縄のロープだけでなく鉄のロープも使います。ワイヤーも9mmのワイヤー、12mmのワイヤー、14mmのワイヤーでこれを切った木にくくりつけてヘリコプターで飛ばします。ヘリコプターの大きさによって使うワイヤーは変わります。だいたい2t〜2t500kgだと12mmか14mm、1t前後だと9mmか12mmとヘリコプターの大きさによって変わってきます。

だから、道具って1本ぐらいじゃ足りないからロープも50本〜60本ぐらいあります。これだけないと仕事ができない。ワイヤーは1回使うと曲がったり、折れたりするから、全部またまっすぐに元へ1日に200本ぐらい戻します。きれいに戻すと次に使うときに使いやすくなるし、持って行くときも持ち運びやすくなります。細いワイヤーは1本買ったときは1600円

で、太いワイヤーになると1本3600円と高いから、大事に使わないといけない。一番古いのは、もう20年ぐらい使っています。ちゃんと手入れをしていたら切れることもなく使えます。雨などが降るので、野ざらしにせず小屋を作ったり、長年使ってさびてきたものにはオイルのスプレーをかけたりにしています。こうやって、きれいにする人はあまりいなくて、



一回使うと曲がったりしてしまうからたくさんの道具がある

使ったら使いつばなしの人が多いですけどね。

私は他にも測量もやっています。専用のコンパスを使って、北からの角度を全部測って、山の地図を描いています。地図を描く理由は、山にも補助金が出るので補助金をもらうためには、図面とか地図がいるので。もし専門の人に頼むと、それなりのお金がかかるので私は、大学で測量の勉強をして、免許も持っているので全部自分でやっています。

なおかつ、ある程度の年がくると、全部切り倒して、また更地になるので、そこにまた苗を植えて元に戻すという循環型の仕事を、長い年月をかけてやっています。

■ やりがい

私たちは代々やっています。だから自分が管理している山が、育っていく様子っていうのが、代々かけて受け継がれています。私の2代前の祖父が植えてくれて、父が育てたのを、私が切ってお金にするという、長いスパンをかけて育ててきた木や山なので、その成長過程をずっと見てきている。木を育てるということは、山をどう作っていくか、どう育てていくかという仕事なので、今日やった仕事、今までやった仕事を振り返ると、自分の後ろに残っていく、大きく育った木を切るのもやりがいはあるけど、



玉井さんが育てている木

小さい木を徐々に育てていくときに、雑草を抜いたり、枝を間引いたりすると、ビフォーアフターね、いわゆる、日の光が入らなくなると、暗くなつて枝がいっぱいあった山が、光が入って、枝がなくなつて、まっすぐに見えて、そして、悪い木を切つて、いい木がいっぱいの山が広がっていく様子を、毎日毎年、10年、20年というかたちで、徐々に育っていく様が見れるということが、一番の自分にとつての生きがいやモチベーションで、やりがいを感ずるところです。

■苦勞したこと

山に登つたり下りたりする移動手段ですね。この辺の地形つていうのは、地理学的にいうと台高山脈という地形で、台高というのは山の上の方が平らで、下の方、川が流れている辺りは浸食されて、すごく急なかたちになっている山が多くて。割と傾斜の緩い丘みたいな山であれば、そこに道を作るのは簡単なんですけど、とつても急なところに道をつけようとする、とつても大変になるし、山の中にたくさん道が走っていないっていうのが、この辺りの特徴です。だけど今は色々便利なものができて、乗用モノレーンというのがあって。1本の線路の上をギアをつけた台車が人を、5〜6人乗せて登っていくのがあって、車で行けない代わりに、山の上の方まで歩いて行かずに登って行くので便利ですが、モノレーンばかりつけるわけにもいかなないので、やっぱり、自分の足で歩いて行かないといけません。標高400mを毎日登つたり下りたりして現場もあります。時間という、だいたい登りで1時間から1時間30分、下るのに50分くらいかけて下りてきます。それを毎日繰り返しています。

■吉野杉と普通の杉との違い

一番違うのは、一番最初に植え付けるときの本数ですね。川上村では8

000本から、多いときは1万2000本ぐらい、たくさん植えます。1万本植えるとする、1ヘクタールのなかに1m間隔で植えていき、100本×100本で1万本になります。1万本より多くなると、木と木の間隔はもつと狭くなります。これは他のところと違うところで、この植え方を密植といいます。狭く植えることで木を競争させる。木は植物なので光合成で大きくなる。光合成をするために陽の光を求める。たくさん植えると光は上からくるので、光を求めて上へ上へ伸びようとする。そうやって育つから、枝を横に伸ばすスペースがないので、他のところと比べて縦に成長する比率が大きいことが違います。もう一つは、吉野杉は根っこに近い部分と木の先端部分の間の木の太さがほとんど一緒ということも普通の杉との違いです。

たくさん植えることで、いい木を1本でも多く残せるから、少ない量を植えるより、たくさん植える方がいいです。台風が来て、木が倒されることもあるし、雪が降り積もって木が曲がることだってあります。でも、たくさん植えることで残る本数も多くなるという利点もあります。

反対にデメリットもあります。たくさん木を植えたから、たくさん手をかけてやらないと、植えたままほったらかしにしておくと、もやしみたいになつたり、いい木が育たなくなつたりということもあります。でも、今まで手をかけた分だけ、いい木が育ってきました。

■山守以外の仕事

山守や吉野林業についてなどは、結構お話する機会があります。一番最初は、地元の小中学校1・2年生に地元の職業、川上村だと林業の話をしてください、実際に山を見せてくださいと頼まれて、お話をしたことがあります。

あとは、私の肩書は、今全部で20ぐらいあるんですけど、ほぼほぼ村に

【聞き書きを終えての感想】



私は初めて聞き書き甲子園に参加しました。最初はうまく話せるか、名人の方と失礼のないように話せるかなど、とても不安で仕方ありませんでした。ですが取材日当日、名人の玉井さんがやさしく声をかけてくださったので、とてもうれしかったです。そして初めて聞く「山守」という仕事のお話。私にとって初めての経験がたくさんありました。

今回の取材を通して「木を育てるということは、山をどう作っていくか、どう育てていくかという仕事」という言葉が心に残りました。林業、ただ木を植えて放っておくのではなく、手間をかけることで、よりいい木を育てられるということが勉強になりました。

私は、最初聞き書き甲子園にはまったく興味がありませんでした。先生に誘われてなんとなく気持ちで参加しようとしていました。ですが、私はこの聞き書き甲子園に参加することができてとても良かったと思いました。めったに、話を聞く機会のない、一つの道にたけている名人の方に自ら県外に行き取材をして、それをまとめるという貴重な体験をすることができたからです。

また機会があれば、森以外の名人の方のお話も聞いてみたいです。



profile

玉井 久勝

たまいひさかつ

昭和31年11月1日・63歳

職業：林業（山守）

【略歴】奈良県川上村出身。中学・高校・大学・専門学校進学のため村を出ていたが、昭和54年11月に、家を継ぐため村へ戻り山守の仕事に継いだ。主に、大規模の所有者が持っている山を任されて、現場管理者として、木を育て、伐採する仕事をしている。

ある団体には顔を出してますね。まず、生活に密接するところやったら消防団であったり、仕事の関係でいうと森林組合に所属している。川上村には2つの組合があります。森林組合と林産組合です。私はその2つともに所属しています。森林組合っていうのは山の所有者のみが入れる組合で、林産組合は山を所有していないけど、山に関わった商売をしている人が入る組合です。森林組合の大きな仕事は、国からおりてくる補助金の受け取りというか窓口みたいなところになります。他には、商工会の役員もしているし、変わったところっていうと、川上村は山登りの観光客がくるので、遭難したりしたときの山岳救助隊の方へも入ってます。昔、子供が草野球をやっていたので、その試合の審判もやっていました。今は、高校野球以外の試合に行き審判をやっています。そのために審判の資格も取りました。

川上村には全国でも珍しい村立の図書館があるんだけど、その立ち上げに関わったときは、社会教育委員とかたまたま村の行政の役も持っていました。図書館が立ち上がったのちは、図書館協議会という諮問機関があつて、その役をやつて、今は会長をやつたりと色々やっています。

「取材日」2019年9月14日、

10月19日」



育てた木の前。玉井さんと私で